

総社市ひきこもり支援センター 『ワンタッチ』設立の経緯と実績

総社市社会福祉協議会

佐々木 恵

1. はじめに

みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました総社市社会福祉協議会でひきこもり支援員をしております佐々木恵と申します。よろしくお願いいたします。

私が、社会福祉法人総社市社会福祉協議会に入職したのは、昨年10月で、それまでは、地域包括支援センターで社会福祉士として総社市で働いておりました。社会福祉協議会とは関連が強い仕事をしていました。それでは、上山先生の後で緊張しますが、説明をさせていただきます。

総社市ひきこもり支援センター『ワンタッチ』設立の経緯と実績ということですが、ひきこもりという現象は社会全体の課題ということで、本人のせいでもなく、家族のせいでもありません。ひきこもりという現象が社会全体の課題として捉えていって欲しいなと思い、総社市におけるひきこもり支援の取り組みについて、約2年前から考えてきました。

総社市の概要ですが、面積が211.9平方キロメートル。人口がここに書いてあるのとは少し増えまして、8月末では、68,448名です。高齢者数も増えております。高齢化率27.5%と、ひと月に0.1%ずつ増加しております。中四国最大の物流拠点ができ、雇用も増えているので、人口も増えております。

総社市の行政計画として、総社市第2次総合計画では基本構想で、全国屈指の福祉文化先駆都市という目指す都市像が掲げられております。比較的、総社は歴史的遺産が豊富で、宝福寺や備中国分寺があります。あと、鬼ノ城は日本名城100選の一つで、岡山城や津山城、備中松山城と並び登録されています。また、新生活交通の雪舟くんというデマンド交通もドア to ドアで走っております。片道300円で乗ることができるので、高齢者や足の不便な方など、1日平均200名がご利用されています。

ここ近年、認知症や孤立、虐待、貧困、ひきこもりの課題が明確化になっています。そこに立ちあはだかっているのが、意識の壁や情報の壁、制度・サービスの壁という3つの壁です。これらの問題解決には、この3つの壁をなくしていくことが重要です。

2. 総社市社会福祉協議会の活動

では、簡単に総社市社会福祉協議会の活動をご説明させていただきたいと思います。総社市では、住民主体の地域福祉事業として、地域社会福祉協議会事業、福祉委員活動、ふれあいサロン活動、ボランティアセンター活動等をしております。課題のある方への総合相談支援事業という事で、この6つのセンターが主になって、色々な総合相談を受けております。また、これらのセンターについては、後ほどご説明させていただきます。これらの他に、介護保険のヘルパーやケアマネなどの在宅福祉サービス事業も行っております。

福祉委員活動の推進については、目的が地域におけるきめ細かい福祉活動の担い手という事で、福祉委員さんに関しては、総社市社協がとても力を入れている事業です。今現在583名の方に担っていただいております、平成29年9月現在で、だいたい45世帯に一人配置されています。どうしても民生委員さんだけでは目の届かない問題や、見守りができない部分があり、福祉委員さんが民生委員さんと一緒に活躍してくださっています。このように地域の間に入っていただいて、見守り訪問や社協だよりの配布など、きめ細かい見守り等をしていただいております。地域福祉活動への協力として、先程から申し上げておりますサロン活動を精力的にしてくださっておりまして、平成18年度は73カ所でしたが、平成29年度になり220カ所まで増えました。これは高齢者の居場所や情報の力となっております。

先程、説明しました6つのセンターで、横断的な総合相談支援体制の推進という事で、平成21年に障がい者基幹相談支援センターができました。その後、障がい者千人雇用センターができました。障がい者千人雇用センターですが、今年の5月、1,000人の目標に達しまして、また新しい目標に向けて、出発しております。その後、平成25年に権利擁護センターができました。

先程、上山先生がおっしゃっておられました行政と協力して中核機関的な役割を担っています。平成26年に生活困窮支援センターができました。元々、ひきこもり支援センターができるまでは、生活困窮支援センターが主となって、ひきこもりに関する相談を受けていました。その後、平成28年に生涯現役促進協議会が総社市にできまして、その窓口として60歳からの人生設計所ができました。55歳以上でも働きたい、地域で活躍したい方の相談窓口になっております。私自身は、この60歳からの人生設計所ができた昨年の10月からこの窓口で働いておりました。そして、平成29年にひきこもり支援センターができました。これら全てのセンターの延相談件数が15,865件。これは前年度の相談実績になっております。

3. ひきこもり支援センター「ワンタッチ」設立の経緯

(1) 事例から見てきた地域の課題

ここで、今まで個別相談支援から見てきた事例という事で、80代の認知症のお母さんと30年以上ひきこもっている精神疾患を罹患している50代の娘さんの事例を少し話させていただきたいと思

います。

お母さんは認知症状がみられ、年金の管理ができませんでした。私自身がこのケースにかかわったのは、地域包括支援センターの職員をしている時でした。第三者からの年金の搾取や経済的にも困窮しており、たびたび、社協の貸付を利用され、それを返すことができていませんでした。娘さんは30年以上もひきこもっており、最初の頃は私が訪問しても娘さんが出て来ることはなく、80代のお母さんが、ドアを少し開けて話をしていました。生活環境は劣悪な状態で、熱中症で救急搬送されることが増え、生活環境を改善しようということで色々と支援がすすみました。

これは実際に社協職員が、生活に困窮しているのはどうしてかという理由を探る為に、一緒に行きつけの商店へ買物に行って、購入する商品と一緒に見ている状況です。

熱中症で救急搬送され、80代のお母さんが入院されました。6月という気候とゴミが蓄積し窓が開かないということで風通しが悪く、積もったゴミが熱を発生して気温が上昇しているという事も原因があり、医師から住まいの環境改善のために片付けた方が良いというアドバイスをいただき、片付けることになりました。その際、一緒に動いたのが社協職員や娘さんにかかわっていた保健師さん、地域包括の職員でした。

皆さん、見られたことはあるとは思いますが、こういった状況でゴミの山を乗り越えて、トイレへ行かれていました。80代のお母さんはゴミを乗り越えてトイレへ行くのは大変なので、水分摂取を我慢していました。そのことも頻回に熱中症で救急搬送された原因の一つです。

だんだんゴミが減っていくのですが、このように台所らしくなり、昔使っていた電子レンジや冷蔵庫も出て、少し生活ができるかなという見通しがたってきました。向こうの方に山積になっている箱ですが、ひきこもりの娘さんが、通販が趣味で購入したものです。外に出ることはないのだけれども、お洋服を買ったり、靴を買ったりすることが、彼女の楽しみでした。まだまだ寝室に関しては、このようにゴミや生活用品が山積みになっている状況ですが、娘さんはお母さんが帰って来るのを楽しみにして、このようにゴミの上に布団を敷いてくださっています。「お陰で綺麗になりました」と、お母さんが退院されました。その後もゴミがちょこちょこ増えていきました。やっぱりなかなか片付けが難しい方々なのだと感じました。お母さんは介護保険を滞納していたので、娘さんの障がいの方でホームヘルパーを利用されて、調理のお手伝いに入っていました。娘さんも買物の為に外出したり、近隣の方と挨拶をされたり、そのような変化ができました。

お母さんの認知症が進行し、市長申立てで成年後見制度を利用されることになり、社協が法人後見を担っていました。市内中心部の集合住宅に住んでおられましたが、この集合住宅は高齢者率が50%以上という状態で、民生委員さんの選任もできていませんでした。地域課題を小地域ケア会議で考える中で、やはり民生委員さんが必要であるという話になりました。その後、民生委員さんを選任することができました。また、福祉委員さんもいませんでしたが、地域の中から8人の福祉委員さんを選任できました。

(2) ひきこもり支援に向けての準備

この事例はほんの1例ですが、生活困窮支援センターが201件相談を受けている中にも40件がひきこもりに関する相談でした。ひきこもりという社会問題をどうしたらいいのかという課題が明確になり、ひきこもり支援の取り組みについて、総社市と総社市社会福祉協議会が取り組んでいくことになりました。

「実際、総社市におけるひきこもりって、どれぐらいいるのか?」、「ひきこもりは家族や個人の課題なのか?」、「地域の方々の身近な支援を受けて、安心して暮らせたらかどうか?」という疑問が出てきました。

本研究会の西田先生にも委員に就任いただいています。総社市内のひきこもりの実態把握及び支援方策等を検討することを目的とし、平成27年8月にひきこもり支援等検討委員会を設置しました。この委員会は、民生委員や福祉委員の代表の方、市地域自立支援協議会、おかやま若者サポートステーション、市保健福祉部や市教育委員会など様々な方面から委員になっていただいています。

さらに、ひきこもりの定義はどういうものなのか、総社にどれぐらいの人がいるかなどを考えるワーキンググループを5つ設置しました。

そのワーキンググループの中で、総社市のひきこもりの定義を「義務教育修了後であって、おおむね6か月間以上、社会から孤立している状態」と決めました。国は39歳以下と年齢の上限を定めていますが、総社市は40代、50代の方、それ以上の方も沢山いるので、上の年齢制限を掲げておりません。高齢になっても、ひきこもりになっている方が沢山いらっしゃることで、障がいがあるなし問わず、このように定義しています。

ひきこもりというイメージは、ずっと家にいて一歩も部屋から出ないというイメージが強いのではないかと思います。社会から孤立している状態ということで、「仕事や学校に行っていない人」「家族以外の人と対面での交流がほとんどない人」「コンビニでの買物やパチンコやゲームセンターには行っても、普段は自宅にいる人」「日中、図書館や公園などで過ごすことはあっても、人と接することを避けている人」についても、ひきこもりの定義に入っています。委員会では、ひきこもりは状態であり、病気ではないということを皆さんで共通認識しました。

この後、ひきこもり支援を考える研修会を地域の民生委員さんや福祉委員さんを対象に、2回に分けて開催しました。288名の方にご参加いただき、その後、民生委員さん、福祉委員さんに向けて、ひきこもり支援を考える地区懇談会を、総社市内の17地区で開催しました。地区懇談会では、このひきこもりの定義の共通認識、実際に地域に引きこもりの方は何人いるかという実数・実態の調査を行いました。この調査は個人の特定をせず、個人情報に配慮した方法で行いました。氏名や年齢等は記入しないこととし、調査の結果、少なくとも207名の方がひきこもっているという結果が出ました。

ひきこもり懇談会から見えてきたこの実数は207名で、この棒グラフでも分かるように、30代、40

代の方が多くなっています。両親と同居している方やひとり暮らしの方もいらっしゃいます。元々、男性の方が地域との関わりが苦手な方が多いのか、男女の割合は男性が6.5割、女性が3割になっています。両親と同居の方が約4割、母と同居の方が2割になっています。ひきこもりの理由も様々で、不登校からひきこもりになる方や障がいがある理由で出られないが続いている方、就職や進学による人間関係でひきこもる方など理由は様々です。その下にあります地区別数ですが、地区によってかなり差が出てきています。中心部は集合住宅が多く、なかなか把握できないため、数が少なくなっています。ひきこもりという社会問題を市民に知っていただきたいという思いで、ひきこもり支援について「社協だより」を全戸配布し、皆さんに知っていただけるように広報していきました。

その中で全国屈指の福祉先駆都市を目指す！という総社市の熱い思いで、ひきこもり支援部会ができ、来年度はひきこもり相談支援センターの設置、ひきこもりサポーターの養成、居場所の設置をしていくという案が出ました。ひきこもりを予防することも大切であるということで、教育委員会や不登校支援を行うふれあい教室にも力を入れていこうという案が出ました。

4. センターの活動と実績

今年の4月11日に、ひきこもり支援センター「ワンタッチ」を開設しました。相談は社会福祉士や臨床心理士の2名の専門職員が対応しております。ひきこもりサポーターの養成について今年度は40人を目指しており、実相談件数も50人の対応が目標になっております。

9月14日時点で、65の方が相談してくださっており、内訳は男性が78.5%、女性が21.5%になっています。年齢層は30代をピークに山型になっており、不登校を続けていた卒業生の中学校の校長先生が相談してくださるなど、10代、20代、30代が比較的多くなっています。

今年度もひきこもり支援等検討委員会を開催しており、ひきこもり支援センター「ワンタッチ」の運営、事業の計画・推進について検討いただいています。今年度はひきこもり経験者の方にも加わっていただき、支援者目線だけにならないようにしています。今年のワーキングは、地域を支えていくということで地域の方にサポーターになっていただくということを基本に、サポーター養成講座を開催予定です。また事例検討ワーキンググループも権利擁護センターの支援検討委員会と合同開催しております。

今後、社会参加ワーキンググループとして、就労体験や中間的就労などの仕組みについて検討していこうと思っています。

今年度は17名のサポーターが登録をしてくださりました。定期的に活動内容を話し、サポーターさんが所有している卓球場や畑を見学しています。

サポーターの方が所有している畑でジャガイモ掘りをするので相談者の方を誘いませんかと、ご提案してくださり、相談者の一人が参加することになったのですが、しかし、当日の朝、「足がつってしまって歩きにくいので欠席します」と連絡があり、参加できなくなりました。この時は「約束

を守れんやつは許さん」と80代のお父さんが代理で参加されました。その後、「やはり、外に出たい。何かしたい。」という事で、最初に窓口となった地域包括支援センターがある特別養護老人ホームでボランティア体験を週2回1時間することになりました。最初に関わり始めたのは4月の終わり頃ですが、100kgを超える体重だったため、「健康の為にも痩せたいな」と目標をもたれました。スポーツジムに行く事を提案し、お父さんの送迎で毎日ジムに行かれ減量に成功されました。減量したため、初日のズボンがブカブカでずり下がり、暑いのに帽子もかぶらず活動していたので、お父さんに実際のこの写真をお見せして、理解をしていただき、体に合ったズボンと帽子を用意してくださいました。

さらに「もっと違う場所へ出て行きたい。どこか家とは違う居場所が欲しい」ということで、50代後半の方だったので、60歳からの人生設計所とコラボしまして、生涯現役セミナーを紹介したところ参加されました。最初は自転車で5分の距離しか出かけられなかったのですが、この会場は自転車で30分ある距離でしたが、頑張っていくことができました。今まで何度も就職もされましたが、職場での人間関係やコミュニケーションが上手くとれないということで、辛い思いをされ、離職されて3年間ひきこもりをされていました。ボランティア体験で自信を回復し、「また就労したい」という意欲が出たこと、ボランティアではお金が得られないので、対価が欲しいというご希望に答えて、4時間の10日間ほどのお仕事を紹介させていただきました。今現在も働いていただいております。今後も本人の意向に沿って、支援をさせていただきたいと思っております。

次にひきこもりサポーターさんですが、みなさん熱意がありまして、更にフォローアップ研修をしております。

7月23日に、まだまだ「ひきこもり」ということを、ご存知ではない、ご理解がない方が沢山おられるので、まずは、ひきこもり支援センターができたことを知っていただくために、ジャーナリストの池上正樹さんをお招きし、フォーラムを開催しました。フォーラムと同時に、ひきこもりサポーターや地域の方が活躍できる場を模擬的に企画してみようということになり、模擬「居場所」を設置してみました。やはり、ひきこもっている方々は、玄関から出て行くことができる場所が欲しいという思いがあります。実際に何があったら外に出られるだろうかとサポーターさんたちと一緒に考え、ゲームをしたり、本を置いてみたり、人に慣れる場所を作ってみました。今後、相談支援に関わっている事例を大切に、まずは一つ、一つの事例からイメージした模擬「居場所」を当事者、専門職、サポーターを交えて実施企画するようにしています。

やはり個人個人で好きなことや興味があることが違うので、趣味活動のゲームや音楽、読書、体験活動など、ひきこもりをしている方にも様々な体験をして欲しいので、スポーツだったり、収穫だったり、調理だったり、生活の体験が必要になっていると感じています。行事では、ハロウィンやクリスマス会など、自分が変装し1枚かぶった状態だったら、対人関係で緊張感が増すことなく出てくることができるよという方もいらっしゃるの、そういう企画もしてみようかなと思っています。

ます。先程、個別の事例に合わせた居場所を沢山したうえで、本格的な居場所を設置していこうと考えています。ひきこもっている方は、きっかけだとか、単に人だとか、道具だとか、そういったきっかけがないと家から出られないので、そのきっかけ作りとなる「居場所」は、すごく必要だなと感じています。「その人がいるから」と出てこられる方が多いので、その人がいるからという「その人」を沢山作っていきたいと思っています。ひきこもりの当事者だけでなく、ひきこもりの方を支える家族の方というの、長年、悩んでいる方もいらっしゃれば、家族がひきこもりになりたてで、情報収集に翻弄している方もいらっしゃいます。ただ、ひきこもり期間が長いと、家族も疲れていることが多く、そこは情報交換とかが必要になってくると思っています。今後、家族向けの研修会ですとか、情報交換会をする事も家族向けに予定しています。

5. さいごに

総社市における、ひきこもり支援の取り組みという事で、今年度は相談支援や訪問調査、就労支援、情報提供など、様々な支援を行っています。また、ひきこもりをしている方が社会の一員として地域で活躍できる為に、私たちセンターは社協として地域作りを目指しています。まだまだ、走り出したばかりですが、この機会をいただいたことで、ひきこもり支援センターとしての役割の整理をすることができました。今後も、より一層センターとしては様々な機関とつながって支援を行っていくことが必要であると感じました。ご清聴ありがとうございました。

(資料1)

第4回岡山権利擁護研究会
平成29年9月16日(土)

総社市ひきこもり支援センター
『ワンタッチ』設立の経緯と実績

ひきこもり支援は、社会全体の課題
～総社市におけるひきこもり支援の取り組みについて～



社会福祉法人 総社市社会福祉協議会
ひきこもり支援員 佐々木 恵

(資料2)



総社市社会福祉協議会の事業

(1) 住民主体の地域福祉事業

- ① 地区社会福祉協議会事業
- ② 福祉委員活動
- ③ ふれあいサロン活動
- ④ ボランティアセンター活動



(2) 課題のある方への総合相談支援事業

- ① 障がい者基幹相談支援センター
- ② 障がい者千人雇用センター
- ③ 権利擁護センター
- ④ 生活困窮支援センター
- ⑤ 60才からの人生設計所
- ⑥ ひきこもり支援センター



(3) 在宅福祉サービス事業
(在宅生活を支える支援事業)

(資料3)



(資料4)

個別相談支援から見えてきた事例

認知症の母(80代)と 30年以上ひきこもっている娘(50代)

- 母は、認知症状がみられ年金の管理ができない
- 第三者から搾取を受け経済的にも困窮している
- たびたび、社協の貸付を利用している
- 娘は、30年以上ひきこもり、誰も会ったことがない
- 生活環境は、劣悪になっている
- 熱中症で倒れ、救急搬送される

(資料5)



(資料6)



(資料7)

総社市におけるひきこもりの実態は？

総社市内にいったい何人？

今までは、家族や個人の課題？

相談機関や地域から、十分な支援ができていなかった？

地域の方や関係機関の支援を受けて、地域で安心して暮らせないだろうか？

社会の一員として、活躍できないだろうか？

(資料8)

ひきこもり支援等検討委員会の設置(H27.8月)

- 目的: 総社市内のひきこもりの実態把握及び支援方策等を検討することを目的とする
⇒ ひきこもり支援は、社会全体の課題であることを確認
- 構成委員: 市民生委員協議会、市福祉委員協議会、地域自立支援協議会、生活困窮支援センター協議会、おかも若者サポートステーション、市保健福祉部、市教育委員会、市社会福祉協議会、備中保健所、ハローワーク、学識経験者
- 事業実施: 生活困窮者自立支援事業、岡山県社会福祉協議会助成事業 (市町村社活動活性化支援事業 平成27年度・28年度)
- 5つのワーキンググループ
①定義設定 ②実数・実態把握 ③調査者・支援者養成 ④支援資源 ⑤分析・まとめ

(資料9)

ひきこもりとは・・・(ひきこもりの定義)

【総社市におけるひきこもりの定義】

「義務教育修了後であって、おおむね6か月間以上社会から孤立している状態」

～例えば～

- ・仕事や学校に行っていない人
- ・家族以外の人と対面での交流がほとんどない人
- ・コンビニでの買い物や自分の興味・関心のあることでの外出はあっても、普段は自宅にいる人
- ・日中、図書館や公園などで過ごすことはあっても、人と接することを避けている人

※ 「ひきこもりは、病気ではありません。」

(専門家、内閣府、厚生労働省)

(資料10)

ひきこもり支援を考える研修会の開催

◆ 民生委員・児童委員(161人)と福祉委員(573人)を対象に2回開催

合計: 288名参加

◇ 第1回研修会(1月7日) ... 194名参加

◇ 第2回研修会(1月9日) ... 94名参加

(資料11)

民生委員・福祉委員 ひきこもり支援を考える地区懇談会

◆市内17全地区で開催:最終的に**207人**の情報

総社市のひきこもりの定義
「義務教育修了後であって、
おおむね6か月間以上社会
から孤立している状態」



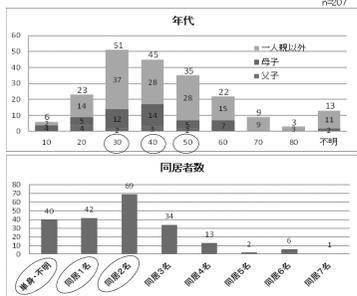
【実数・実態の調査】
個人の特定をしない
個人情報に配慮した調査
→氏名や年齢等は記入しない

(資料12)

ひきこもり懇談会から見てきた実態

懇談会であげられた
ケース
207人

- 若い世代(30代~40代)の方が多い
- 同居2人が最多
次に、同居1人
ひとり暮らしの方も



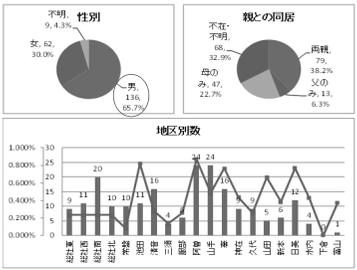
(資料13)

ひきこもり懇談会から見てきた実態

- 男性が6.5割、女性は、3割
- 両親と同居が約4割
- 母と同居が、2割

《ひきこもりの理由》
○不登校の経験・傾向 (18)
○降がらない? (22)
○病気 (6)
○いじめ (5)
○虐待 (1)

- 地区によって、かなりの差がある
- かなり詳しく実態を把握されている地域がある



◆総社市内のひきこもり率、平均 **0.30%**
◆総社市内のひきこもり率、地区別 **0.08%~0.87%**

(資料14)

ひきこもり支援について市民の理解を!

「社協だより」でひきこもりの連載特集(全戸に配布)

民生委員・児童委員及び福祉委員
地区懇談会が全地区で開催されました!

ひきこもりの方...207人

ひきこもりからつながる
地域づくりフォーラムの開催

ひきこもりの方へ
「社会全体の手助け」



(資料15)

全国屈指の福祉先駆都市をめざす!

(第2次総社市総合計画 平成28年~平成37年)

【全国屈指福祉会議 ひきこもり支援部会】

- ひきこもり相談支援センター(仮称)の設置
 - ワンストップの相談窓口の設置(専属相談支援員2名の配置)
 - パンフレットやインターネットで周知
 - 関係機関と連携し、切れ目のない相談支援体制を整備
- ひきこもりサポーターの養成
 - ひきこもり問題を理解し、支援活動を行うサポーターを養成
 - ひきこもりから自立した者が支援者となるピアサポーターを養成
- 居場所の設置
 - 相談支援もできる有効な居場所の設置
 - 社会へ踏み出す出発点となる環境を整備



(資料16)

総社市におけるひきこもり支援事業の実施

- ひきこもり予防
 - 不登校はひきこもりの原因の1つ
 - 長期欠席児童生徒へのアプローチ(支援員の配置)
- 情報提供
 - 市民にひきこもり支援の理解を広げる 「社協だより」の特集
 - ひきこもりの方へ支援資源を広く伝える広報活動
- 就労支援
 - ボランティア体験、生活支援サービス、一般就労など多様な就労形態の創出
 - 市内社会福祉法人との連携による社会貢献活動(体験の受入)



(資料17)

ひきこもり支援センター「ワンタッチ」の誕生!

○専門の相談員が対応!
・2人の専任相談員(社会福祉士・臨床心理士)
・電話、メール、訪問での相談
⇒50人の対応

○ひきこもりサポーターの養成
・理解ある市民が支援
⇒40人のサポーター

○居場所の創設
・気軽に立ち寄れる場所
⇒下半期に立ち上げ

市町村では、全国でも例のないセンター



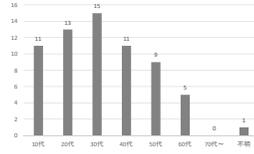
(資料18)

ひきこもり支援について

■相談者数 65人 男性51人(78.5%)、女性14人(21.5%)
(H29.4~H29.9.14実績分)

■対象者の年齢層

10~19歳	11人	17%
20~29歳	13人	20%
30~39歳	15人	23%
40~49歳	11人	17%
50~59歳	9人	14%
60~	5人	8%
不明	1人	1%



(資料19)

ジャガイモ掘り



◆サポーターの1人がジャガイモ掘りをするので相談者の方を誘いませんか?と提案

⇒相談者の1人が参加することに!

⇒しかし、当日の朝に「足をつて…」と連絡が…

⇒代理で本人の父親が参加

たくさん収穫できました♪

(資料20)

特別養護老人ホームでボランティア体験

2回目

初日



(資料21)

生涯現役セミナー参加



シニア世代の
「働きたい」「活躍したい」
を応援します
☎0866-92-8586

電話予約 プライバシー保護

【対象者】
まだまだ働きたい・社会や地域に
貢献したいとお考えで、
社会的に定年までの65歳以上の方

※2024年10月1日より
75歳以上の高齢者も対象となります

そうじゃ 60歳からの人生設計所

(資料22)

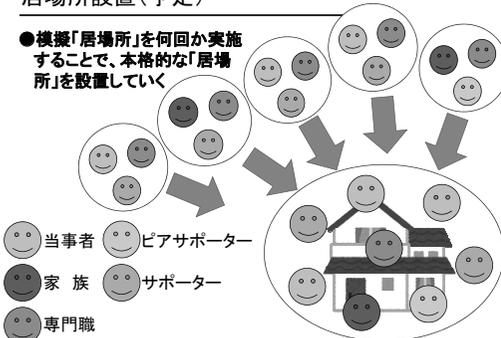
短期就労



(資料23)

居場所設置(予定)

●模倣「居場所」を何回か実施することで、本格的な「居場所」を設置していく

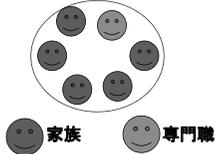


●当事者 ●ピアサポーター
●家族 ●サポーター
●専門職

(資料24)

ひきこもり家族会設立(予定)

- 家族会設立準備会
ひきこもり家族会の設立に先駆け、今後の研修会や情報交換会の内容等
- 家族向け研修会
ひきこもり経験者やその家族の体験談、専門家による講義等聞き、家族同士の意見交換等を通して、当事者への日々の関わり等、当事者理解を深める
- 情報交換会
- 家族会便りの発行



●家族 ●専門職